

水谷 寶清寺



宝清寺の境内には、毎年沢山の花が咲きます。
第六十一号より新聞裏面に宝清寺で見られる草花を紹介しています。

おのれ (十三日、十六日)

お施餓鬼法要

七月十七日(日)
七月十八日(月)
十一時～十二時

お祈りの用意があります。

本年のお施餓鬼は日曜日で、お休みの方も多いと思いますので、お塔婆をお供えし「家族で墓参致しませう」。

また、お盆を機に、日頃話題にすることが少ないと思われるが、もし不幸があっても慌てず、お寺のトラブルを未然に防ぐために、宝清寺発行の「墓地使用許可書」添付の「宝清寺墓苑使用規則」及び「各手続者の「案内」を読む機会を作ってくださいようお願い致します。

橋墓苑使用契約を結ばれた方の関係者にも不幸があり、橋墓苑に埋葬される予定のある場合は、先ず、宝清寺にご相談ください。子供たちに負担を掛けないようにと、将来を考えて、橋墓苑の永代使用を契約された方が多数あります。その場合、契約者

日蓮聖人 遺訓 (二一六)

「縦い貧なりとも信心強しして
志深からんは
仏に成らん事疑いあるべからず」
(身延山御書)

幸せな家庭を作るといふ事は、貧富の差によるものではなく、信じあう心、信ずる心にあることを説いたお言葉です。

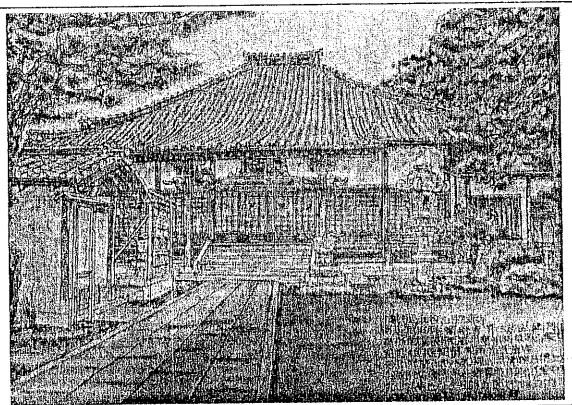
は両親であり、そのご両親が亡くなられた場合に、亡くなられた契約者とお寺の契約関係が家族に伝わっていない場合があります。そうした状況の中で、肉親を亡くした悲しみと動揺から、親戚の意見や葬儀社の主導により、お寺との契約関係が全く無視されたかたちで葬儀が行われ、葬儀が済んだ後に四十九日忌と納骨の申し出があり、トラブルになることがあります。

最近では病院で亡くなるケースがほとんどで、病院から葬儀社を紹介された場合、菩提寺があることを伝え、通夜・葬儀の日程について、先ず、菩提寺の住職の都合を確認した上で、詳細の打ち合わせをされるようお願い致します。

「もしもその時は先ず、菩提寺に相談を！」
を心掛けて下さるようお願い致します。

水谷 宝清寺の境内

ある日、松田静男氏ご夫妻が尋ねてこられ、本堂を描きたいと申し出られた。私は、よくある趣味のスケッチと思っただけで、再び来寺されたときにも留めなかったが、再び来寺されたとき話す機会があった。松田静男さんの話では、「東京にもまだ雰囲気のある貴重な木造建築が残っていることを多くの人に知って欲しいと、寺の本堂を描くことにこだわって描き続けている」とのこと。奥様の文代さんが地図で寺の下見に行かれるそうだが、都内の寺院の七割以上がコンクリート造りでがっかりすることも多いと話す。平成二十一年六月に「木造の寺第五回絵画展」温故知新こころの旅 大江戸東京巡礼 一九〇ヶ寺！と題して個展を開かれたようだ。一九〇ヶ寺もの多くの寺院を描いてきたことに驚かされた。以前に描かれた掘り



内妙法寺の祖師堂を描いた絵はがきをいただいた。そのときから絵の完成が待ち遠しくなった。

住職ひとと口法話 (第二十六)

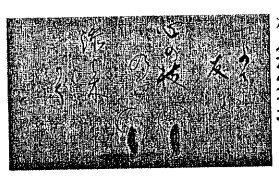
東日本大震災の復旧・復興が遅々として進まず、被災された方々は今なお「苦しみの中に」いる。日蓮聖人のご遺文に、『病によりて道心はをこり候か』(妙心尼御前御返事)とある。このお言葉は、病に苦しんでいる夫を持つ妙心尼を励ました御消息の一文です。人間は生きていければ、生老病死の四苦から逃れることはできない。日蓮聖人は、「人間の病」と「社会の病い」とを並べて妙心尼を励ました。人間は肉体的にも精神的にも病気になる可能性がある。しかし、人間は肉体的に治癒させる力を持ち、精神的にも苦しみを克服する力を同時に備えている。しかし、肉体的な「病」には薬が必要であるように、精神的にも「良薬」が必要である。その良薬が法華経でありお題目であると説き、お題目を唱えて信心を深めることを勧め、妙心尼を励まされた。今、日本は東日本大震災による、地震・津波・原発事故・復旧復興の対応の遅れにより、『四苦』の『病』に掛かってしまった。日蓮宗でも、義援金の他に、六月十八日に新宿の常圓寺で被災された方々の「東日本大震災災物故者百箇日忌追悼法要」が営まれた。震災で亡くなった方々の「良薬」は、「供養」であり、被災された復旧・復興に尽力されている方々の「一日も早い実現を願う」良薬は「国土安穩の祈り」である。しかし、祈りだけでは被災された方々の実質的な復旧復興の促進にはならない。災害という「病」の「良薬」は「国土安穩の祈り」である。しかし、祈りだけでは被災された方々の実質的な復旧復興の促進には、「病」に対して、今こそ「智恵」の「良薬」を以て対処するべきだが、求められているのではないだろうか。

書画の鑑賞

八王子市在住の書画家小野寺一涯氏が来寺され、(左写真)の書画を奉納されました。

友は
心の枝
添え木
かな

書かれたままの作品を、趣味で表具を勉強されているお檀家の林幸子様に裏打ちをお願いし、額に入れて本堂入り口に飾りました。お参りの時などに鑑賞ください。



宝清寺年中行事

三月 彼岸中日・塔婆供養
 四月 八日・花祭り
 七月 十七日・孟蘭盆会供養
 七月 十七日・お施餓鬼法要
 九月 彼岸中日・塔婆供養
 十月 十二日・お会式法要

日蓮宗の聖日

二月 十五日・釈尊涅槃会
 二月 十六日・宗祖降誕会
 四月 八日・釈尊降誕会
 四月 二十八日・立教開宗会
 五月 十二日・伊豆法難会
 五月 十七日・身延御頭会
 八月 八日・松葉谷法難会
 九月 十二日・龍ノ口法難会
 九月 十八日・池上御入山
 十月 十三日・宗祖御会式
 十一月 十一日・小松原法難会

御祈願・御供養

交商通 繁盛安
 厄位 祈
 運産 祈
 守守祭願除封願全

宝清寺では、花祭り(灌仏会)、お盆(孟蘭盆会)の施餓鬼法要、日蓮聖人のお会式を毎年盛大に厳修しております。
 このほかにも諸祈願や自動車のお祓いや、年忌供養・祥月命日供養・月命日供養等も行っております。詳しくは寺務所までご相談ください。

仏様の話し

この新聞を読まれる頃には、新緑の季節から盛夏に入るところだと思われるが、少し前のお話しをさせて頂く。
 今年の春の訪れは少し遅かったよう
 で、宝清寺の枝垂桜は、「花まつり」の頃に散り始めた。新しく幼稚園に入園する子供の列を見かけたとき、私もかつて幼稚園に行っていたことを思い出した。幼稚園は、世田谷にある二階堂学園付属の幼稚園で、「みどり幼稚園」という名であった。園長先生が毎朝訓辞をなさる幼稚園で、いつもお約束のごとく最後の締めくくりは「雨にも負けず、風にも負けず、元氣なこども、みどり幼稚園」と言っていた。
 大人になるまで、この言葉は幼稚園の標語だと思っていたが、宮沢賢治の「雨にも負けず」の冒頭の一節であることを知った。ここで全文を見てみると

「雨ニモマケズ」

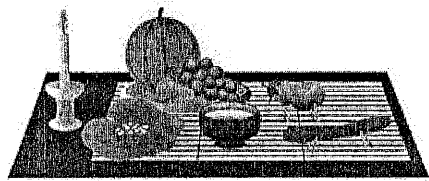
雨にも負けず 風にも負けず
 雪にも夏の暑さにも負けぬ
 丈夫なからだをもち
 慾はなく 決して怒らず
 いつも静かに笑っている
 一日に玄米四合と
 味噌と少しの野菜を食べ
 あらゆることを
 自分を勘定に入れて
 よく見聞きし分かり
 そして忘れず
 野原の松の林の陰の
 小さな萱ぶきの小屋にいて
 東に病氣の子供あれば

行って看病してやり
 西に疲れた母あれば
 行ってその稲の束を負い
 南に死にそうなる人あれば
 行ってこわがらなくてもいいといい
 北に喧嘩や訴訟があれば
 つまらないからやめるといい
 日照りの時は涙を流し
 寒さの夏はおろおろ歩き
 みんなにでくのぼーと呼ばれ
 褒められもせず
 苦にもされず
 そういふものに
 わたしは なりたい
 宮沢賢治は日蓮宗の熱烈な信者で、その多くの文章のなかに示唆的に法華經の教えが内包しているものが散見される。「雨にも負けず」の文章も多くの学者が研究しているが、私が思うに、この文章は法華經に登場する常不軽菩薩の輪郭と重なるところがあると考える。
 常不軽菩薩は、常に放浪し人を見かけると、どんな人でも「あなたの中には仏の種があり、いつか仏となる花が咲くでしょう。だから私はあなたを拝みます」といつて歩いたそうです。
 たまに、棒で殴られることもあり、石を投げつけられることもあり、今度は遠くから、その人を拝んだと言われます。くしくも宮沢賢治は今回、大震災が起った東北の出身者でした。彼がいま生きていれば、まさに被災にあった人々のもとに行き、心に刺さったトゲを丹念に抜いて歩いたこととおもいます。



お盆の案内

宝清寺では、毎年お盆の時期に、各ご家庭を訪問しお経をお上げする「お経回り(柵)」を行っております。
 お盆はご先祖様など、お亡くなりになられた方が、自宅に帰って来る時期と言われる。帰って来た仏様をご家族が温かく迎えてあげ、季節の野菜や果物または生前、好物とされていた食べ物等をお供えし、お経を上げてその魂をなぐさめる行事です。
 日蓮聖人は「孟蘭盆御書」に、お盆の時期にご先祖様をお迎えし、御供養を施せば、「上七代」下七代の先祖と子孫が救われるだけでなく、その親戚縁者までも供養の利益が行き渡ると述べられています。
 「供養」とは読んで字のごとく、亡くなった方のためだけではなく、生きていらっしゃる人へも利益がもたらされるものなのです。生命保険や自動車保険は、万が一の時に保証されるものですが、亡くなられた方の供養は万が一の事が起きた時でも、「大難は小難、小難は無難に」してくださる、災難に遭遇しないための保険のようなものなのです。
 お盆の時期は、神仏やご先祖様へ法味をささげ、日頃の安泰を願い、感謝することを大切に行事です。



宝清寺の草花

藤原定家は紫陽花について以下のように歌っている。
 「あぢさるの 下葉にすだく 蜜をば 四ひらの数の 添ふかとぞ見る」
 日中は紫陽花の大輪が人の目を引き、宵闇が近づくと葉の裏に隠れていた蜜がほかに発光し、星とは違がった紫陽花の美しさを発見させてくれます。
 シトシトと降り続く雨の季節は、ウツウツとした憂鬱な気分になるものです。しかし、見方を変えれば紫陽花のまわりにもカタツムリや雨蛙など多くの生き物が雨宿りをうけていて、いざれ訪れる盛夏の前の一時の潤いを楽しんでいるかのようです。
 宝清寺では、来寺される皆様心が潤っていただけすように、多くの草花でお出迎えするよう心掛けています。また、皆様にご利用される水谷庵(家族用の葬儀会場および法事用会食所)の庭に紫陽花を多く植樹しました。



発行・水谷山宝清寺
 住所・東京都あきる野市小川一〇一
 電話・042-558-2663
 FAX・042-558-2693
 インターネット・ホームページ
<http://www.ab.auone-net.jp/~houseiji/>
 メールアドレス
houseiji@ac.auone-net.jp